

ゲマインシャフトって 何でしたっけ？

坂田三允

群馬県立精神医療センター・看護部長

『ナラティヴの臨床社会学』

野口裕二 著

定価 2730 円(本体 2600 円+税 5%)

勁草書房 ☎03-3814-6861



本書には、臨床社会学者である著者が臨床領域におけるナラティヴ・アプローチ(物語という視点から現象に接近する1つの方法)の展開の跡をたどり、そのアプローチが臨床社会学の一方法としてもつ可能性を検討することを目的として、ここ数年の間に求めに応じて書かれたものがまとめられている。

当然のことだが、発表媒体によって読者層は異なり、著者の目はときには臨床家に向けられ、別のときには社会学者のほうに向けられる。

ナラティヴ・セラピーの具体的なことはほとんどわからず、社会学については「学生時代にそんな科目が必須になっていたなあ」という程度の知識しか持ち合わせずに本書を読むというのは、少し無謀であったかもしれない。社会学者に向けて書かれたと思われる論文に関して、社会学辞典のお世話にならずに読むことは不可能であった。(ゲマインシャフトなどという言葉は、遠い昔にたしかに聞いた記憶はあるが、それが何を意味するのかはすっかり忘れてしまっている。連字符社会学となると、耳にしたこともなく、何を意味するかもわからない。ちなみに、連字符とはハイフンのことだそうである。)

とはいえ、サイコセラピーとソーシャルワークという2つの臨床領域をとりあげ、その領域とナラティヴ・アプローチはどのように関係しているのか、また今後どのような展望を切り開いていくのかについて検討された第II部は、社会学の視点で現状が分析され、本当にそうなのだろうかという疑問を抱きつつも、大変興味深く読むことができた。

例えば、「わが国では、サイコセラピーへの関心が最近とくに高まっているように見える。(中略)『連続幼女誘拐殺人事件』、『地下鉄サリン事件』、『神戸児童連続殺傷事件』など」(中略)の「衝撃的な事件の際にも、マスコミはこぞってサイコセラピストたちに解説を求めた。それらの解説を参考にしながら事態の把握に努めたひともしなくなっただけである。つまり、サイコセラピーは単にクライアントに対する実践であるにとどまらずに、社会現象の解説や定義をおこなうという重要な社会的機能を果たしている」。そして「われわれの内的世界はもはや心理学の言葉なしには語れなくなり、また、心理学の言葉で語ることが内的世界をそのようなものとして認識させるように作用して」いて、「セラピー的な言語は、自己や社会を語る際になくしてはならないものになっている」というような見方である。

そのような面はたしかにあるかもしれないと思う。私もそのような言葉をよく使う。しかし一方で、それは私が精神看護というサイコセラピーを身近なものとする位置にいるからではないかという思いも強い。

「アダルトチルドレン」「PTSD」などという言葉を用いなくても、もっと普通に、もっと当たり前の日本語で、私たちは自分のことを語ることができるのではないかと思うのだ。1つの現象は、いろいろな位置からいろいろな見方ができるのであり、それを自分の中にどう取り込んでいくのかによって、自分が広がったり固まったりするのだろう。そんな思いを強くした1冊であった。



さかたまよし◎このコーナーは、本年からほんの少しリニューアルいたしました。編集部が精神看護に関係のあるような書籍を選び、それを読んで書くということになりました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。